直ちに連続闘争展開

圧倒的成功おさめた民学同大会

四月闘争への前進を決意

ベトナム危機とドル・ポンド危機に象徴される先進国危機と後進国危機が同時的に進行する「危機と反動の時代」にあって、七〇年アジア・核安保＝日米階級同盟の再編強化に全面的に対決する政治組織方針の確立という歴史的任務を担った民主主義学生同盟第九回全国大会は、三月二十六、七の両日、大阪に全国から八十余名の代議員、百余名の評議員を結集して白熱した討論をおこない成功裏にもたれた。羽田―佐世保闘争によって開示された第三期学生運動の新たな地点を発展的に継承し、民青派の日和見主義、三派の小ブル急進主義を止揚しつつ、激動の七〇年安保闘争を担う戦闘的・大衆的学生戦線の再建統一という偉大な事業のヘゲモンとして更なる前進をかちとることを全員一致確認した。大会に先がけ、一部分派集団（阪大派）が七〇年戦線から離脱し、同盟から脱走したにもかかわらず、新たに神戸外大支部、関西大支部、さらに佐世保闘争のなかで九州各大学の同志が同盟に結集し、全国同盟としての質的強化が一歩前進した大会であった。「激動の七〇年安保闘争を担う戦闘的政治同盟を建設せよ！」のメイン・スローガンのもとに大会では次の方針が確定された。①「危機と反動の時代」に照応する七〇年安保戦線の戦略②不屈の全国的政治同盟の建設を担う指導部の選出と組織方針の確立③春季闘争の第一弾をベトナム侵略拠点の撃破＝王子野戦病院開設阻止闘争に設定、三・二八、三一、四・一連続闘争をステップに四―六月闘争を闘い抜き④以上のなかで七月全国自治会共闘結成を支える春季自治会選挙勝利と構革派の一元化実現のための「統一協議会」を設置する。この方針を確定した民学同九大会は、同盟の質的転換の第一歩を刻印する大会であり、疑いもなく七〇年戦線の戦闘的翼として、かつまた統一のヘゲモンとして飛躍した歴史的大会であった。

民学同大会の成果をふまえ 四月大闘争の高揚のために

共産主義労働者党学対部

民学同の左転換を実現し、その一層の推進を決定した民学同第九回大会は成功裏に終了した。労働者党学対部は、民学同九大会の諸決定を全面的に支持するとともに、同九大会における政治討議の成果をふまえ、次の党学対部政治報告を作成した。政治報告は、六七年秋期以降の闘争の総括、情勢分析、一般政治方針からなりたっている。これが四月闘争の爆発的高揚を準備する過程ですべての先進的活動家のなかで広く深く討議されることを期待する。

昨秋以降の諸闘争の総括

佐藤訪ベトナム、訪米、エンタープライズ寄港闘争を軸に闘われた昨年秋期以降の闘争の総括の視点として次の四つを提起する。

第一に、今日の闘いが不可避的に要求する運動の国際的性格であり、第二に、独占資本主義社会の日本型存在形態たる戦後民主主義型歴史構造と今日の運動の特質の関連についてであり、第三に、秋以降の運動構造の特質についてであり、第四に、自治会共闘、反戦青年委員会の評価の問題である。

第一の視点、今日の反政府闘争の国際的性格の問題からはじめよう。今日、先進資本主義世界における国家独占資本主義の過度爛熟ドル危機に象徴される世界資本主義の統一性の基礎の動揺、世界的過剰生産傾向、階級矛盾の成熟。他方、後進国における民族解放闘争の劇的な前進と対先進国貿易での共同歩調の強化、総じて、「第三世界」の歴史の表舞台への登場。かかる先進国危機と後進国危機の同時的進行に加え、社会主義社会体制存在とその新たな段階への模索。今日の世界の基本的要素が、緊密に結びあわされ一つの新しい一時代を型づくっている。まさに「世界のどの一点でのモメントも全世界的なモメントなのであり、それは世界構造に厳密に規定されつつ、それを震感させる」のである。

世界資本主義の体制的危機と再編の進行、その一環としての日米階級ブロックの再編強化、七〇年アジア核安保への移行に対決する闘いが自国政府に対する闘いであるが故に、その国際主義的性格を獲得しつつあるのである。

秋の訪ベトナム・訪米阻止闘争にあっては、かかる国際主義的質は、自治会共闘、反戦青年委員会などの少数の自覚的部分の闘いにしかみられず、一〇・二一闘争にみられる秋期最大のベトナム闘争は、ベトナム反戦一般のカンパニア的性格を色濃くもたざるをえなかった。

エンター闘争は、それが日米共同声明具体化の本格的一歩でありその攻撃の質の重さは人民をして反戦―反核意識を基礎とした反政府意識の形成へとむかわしめた。エンター闘争を契機に、日本のベトナム反戦闘争は、その国際主義的性格の自覚を開始したといえるであろう。ここにいたって、日本階級闘争は、安保・日韓以降の階級的力関係の全般的後退の中で反撃への足場を築きえたのである。

第二の視点、戦後民主主義と今日の闘争の相互関係の問題にうつろう。一般的には、民主主義は、資本主義の最良の外被としての民主共和制をその基軸とする今日における独占支配の体制である。それはまた人民の側に政治的民主主義―階級闘争の広範な舞台を提供する。戦後日本における民主主義体制は、平和的・民主主義的憲法体系の存在とその大枠を防衛する強固な部隊の存在を軸点にし、日本経済の構造的脆弱性を基底的条件として存在していた。それゆえに支配層は憲法の枠組という政治的上部構造のアキレス腱と、経済の構造的脆弱性をかかえこんだまま、世界資本主義の危機と再編に先行され、主導されつつ、自らの再編と強化を行わざるをえなかった。

このことが、日本の対外的進路、コースをめぐる選択が階級闘争の最大の焦点となった理由であり、そこに日本帝国主義の弱さと強さの秘密がひそんでいる。かくて「平和と民主主義」イデオロギーが、支配階級のイデオロギーの大枠内で、支配階級への批判・抵抗のイデオロギーとして広範に存在し機能しえたのである。佐世保・王子における「市民」の広範な決起と組織化の進行の基礎はここにある。

日本資本主義の政治的上部構造と経済構造のもつアキレス腱は、独占支配体制の不安定性と動揺の基礎である。

このことは、第一にかつての独占＝旧中間層ブロックにかわって確立されつつある近代的政治ブロック（独占＝労働者上層）の動揺と解体の一条件を与えており、第二に、六〇年安保における「安保と三池闘争」の関係を、新しい段階における国独資の集中的矛盾の爆発点としての「安保と国鉄反合闘争」の関係としての再現を作りあげつつあるかにみえる。民社・公明のエンター闘争への参加、国鉄の長期的・大衆的反合理化闘争は、かかる脈絡の中で位置づけられるべきである。戦後民主主義のプラスの遺産の継承と、その新しい条件下での再生はエンター、野戦闘争の中で実現されつつある。

第三の視点、運動構造の分析にうつろう。

秋以降の闘いは主として佐藤内閣のいくつかのベトナム侵略拠点、いくつかの外交的反動拠点、いくつかの矛盾の集約的分野をめぐる攻防戦であった。砂川・佐世保エンタープライズ・王子野戦病院・羽田・国鉄軍需物資輸送拒否・反合闘争はその攻防戦の舞台であった。かかる攻防戦の舞台の設定は、運動構造に二つの基軸を与えた。第一の軸は、侵略拠点、反動拠点、矛盾の集約的分野への全国動員による拠点の包囲、焦点の明確化、現地市民の多数の獲得と定着であり、第二の軸は、全国の職場・学園における大衆的政治集会、街頭行動である。

しかしながら第二の軸は、エンター闘争における首都反戦闘争の高揚を除いては、現地以外の闘争の急速な発展は実現されていず、学生線戦にあっては、名大、岡大の二校のみが唯一典形的大衆闘争を組みえたという状況であった。

かかる運動の街頭主義的性格、労働者ヘゲモニーの不在、現地闘争への一方的偏向、全国闘争の未熟を現地―全国を結ぶ大衆的機動戦の網の目と、全国的労学政治ストがとってかわらなければならない拠点を包囲する地域共闘、市民的多数派の形成による波状的連続闘争の展開を軸にしつつ、決定的局面における全国動員、全国的支援体制の確立による現地闘争の補完と完成という現地闘争の新しいパターンを生み出し、それを基本的に全国闘争が支え、拡大する必要がある。

野戦病院開設阻止闘争において千名以上の組織された市民による波状攻勢と、自治会共闘との共闘の深化は、新しい闘いのパターンを生み出しつつあり、われわれが、これを全国闘争として各地方における大衆的組織化に成功したとき、それは勝利への現実的条件の一つを形成するであろう。

第四の視点、今日における青年学生共闘の中心軸たる自治会共闘と反戦青年委員会については、砂川闘争で部分的に登場した自治会共闘が、羽田闘争を経て、エンター闘争の中で現地―全国闘争においてかつてない戦闘力と大衆性を発揮し、七〇年戦線への全国的進出の巨大な一歩を踏み出したこと反戦青年委員会が特に首都における運動を事実上支える部隊への発展を続けていることを確認して、詳細は戦線統一、一般政治方針の項にまちたい。

われわれをめぐる内外情勢

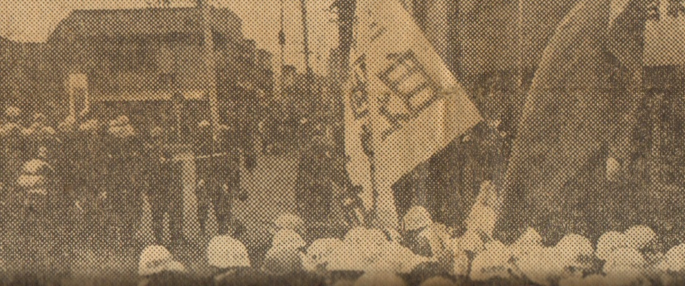
ドル危機、ベトナム危機は今や最終局面に突入した。ドルを基軸に構成された世界資本主義の相対的安定の一時代は最後的に崩壊しはじめた。昨秋のポンド危機の爆発以降、金戦争・通貨戦争の継続的亢進は、いまドル危機―国際通貨恐慌の様相を呈して、世界資本主義を根底的に動揺させている。他方、世界危機の焦点たるベトナム戦争は、ベトナム人民の英雄的総反攻の前に、アメリカ帝国主義の敗北を必至とさせる段階に突入した。カストロの叫んだ「英雄的ゲリラの年」一九六八年は、ベトナム人民の輝やかしい勝利を一歩一歩登りつめていく年になるであろう。世界帝国主義は、ドルかベトナムかの二律背反的な二者択一を迫られ、出口のないジレンマに陥いっている。

一九五八年に始まった戦後世界資本主義体制の再編はドル体制を前提にし、その内部に生じた不均衡を解決し得ないまま、ドル危機・後進国危機を顕在化させていった。鉄の如く自己を貫徹する、不均等発展の法則は、戦後体制の特質に規定され、通貨不安・後進国危機に構造的に結節されていった。ドル体制の動揺下に始まった戦後体制の再編は、いまやドル体制自体を根本的に崩壊させざるを得ない局面に危機を押し上げた。危機の深さは、ドル体制が世界史に登場した最後の統一的な世界体制に他ならず、アメリカ帝国主義がこの危機を回避する能力を喪失し、アメリカにかわる世界帝国主義の盟主が存在しないところにある。従って、この体制の崩壊過程は、一方では体制的動揺↓体制的震感↓世界帝国主義の死滅に至る不安定な一時代を不可避とし、他方では崩壊過程でのドラスチックな世界帝国主義の再編へと転化せざるを得ないであろう。まさしく危機と激動の時代に突入したのだ。

七〇年安保は、かかる危機と激動を背景に、日米階級同盟の侵略的再編・強化としてわれわれに突きつけられている。アジア核安保への道は、日本独占資本の死活を賭けた他民族抑圧への道であり、後進国民族解放革命・社会主義への直接の敵対に転化するものである。「他民族を抑圧する人民は自由であり得ない」（マルクス）以上、日本人民はこの道を拒否しなければならない。七〇年安保の国際主義的任務に忠実であろうとするならば、「抑圧民族と被抑圧民族を区別しなければならない、抑圧民族の人民は言葉だけではなく行動で自己の国際主義を示さなければならない」（レーニン）。われわれの行動は、七〇年アジア核安保を断固阻止し、不退転の決意でこの任務を成し遂げることである。

ドル危機の新段階と世界資本主義の動揺

昨秋のポンド切り下げを画期として、ドル危機の新たな深まりが開始された。ドル体制は、安定的一時期を最後的に終焉し、危機と激動の時代に突入し始めた。ウィルソン政権は、昨年十一月、一連のドラスチックなポンド救済策を断行した。①ポンド平価の一四・三%切下げ　②緊縮政策の断行と短期資本流出を阻止するために、公定歩合の五八%（危機レート）への引上げ　③ＩＭＦ、先進帝国主義国からの十数億ドルの緊急借款。ポンドを切り下げに追いつめた諸要因は第一に、戦後英国経済の長期的低滞が英国の商品競争力を低下させ、構造的な貿易収支の赤字を累積し、第二に、戦後低下した、政治的経済的力量にもかかわらず、ドルと並ぶ基軸通貨たる位置を維持するために遂行したポンド撒布（特に英連邦諸国への資本輸出と対外軍事支出）の結果



成功した民学同大会

激動の七〇年闘争を担う戦闘的政治同盟の建設へ

東京にて　**民主主義学生同盟全国委員会**

民主主義学生同盟第九回大会は、三月二十六、二十七日開催され、圧倒的に成功した。大会は七〇年安保に向け、すでに切り拓かれた地平をさらに大胆に推進する基本方向を確定した。

今大会は、七〇年安保の激動に耐えられない一部右翼日和見分子（阪大派）の分裂・脱走という異常な事態をも乗り越え、規約を厳格に遵守し開催された。わが同盟は、ドル危機とベトナム危機が深刻な二者択一を迫られる世界帝国主義の根底的動揺期に、危機と激動の時代を背景に一大転換を成し遂げた。わが同盟の左への転換、七〇年戦線への本格的組織的介入は、ひとり構革派学生運動の前進に貢献するばかりか、日本学生運動の未来をも左右する端緒をなすであろう。

今九回大会は、「激動の七〇年安保闘争を担う、不屈の戦闘的政治同盟を建設せよ！」のスローガンの下に、七〇年安保の戦略・戦術・組織的任務を体系的に確定した。第一に、七〇年安保の基本性格・世界史的位置を明らかにし、反独占民主主義闘争とプロレタリア国際主義の結合、七〇年安保闘争の優れて国際主義的な質と内容をわが同盟の党派性として打ちたてた。第二に、七〇年安保を闘い抜く、統一戦線の形成と、その階級的強化の方向を、日本型統一戦線の市民主義的・カンパニア的性格の止揚と、青学共闘の独自部隊の形成において定めた。とくに、学生戦線の戦闘的統一を推進する運動実体として、全国自治会共闘の組織的確立を今夏にかちとり、反戦青年委員会―自治会共闘の組織的共同闘争に大胆に乗りだす方向が確認された。第三に、全国学生運動のヘゲモニーとして登場するわが同盟の主体建設を闘いの試練を通じて築きあげる任務を課した。

民主主義学生同盟のかかる転換は、わが同盟内部の右翼日和見主義集団との長期にわたる激烈な闘争を通して獲得されたものであり、直接の契機は、羽田―佐世保闘争への構革派学生運動の全国闘争への主体的介入によって与えられた。羽田闘争―佐世保闘争によって切り拓かれた地平は、現地自治会共闘の結成＝構革派学生運動の全国性の回復を突破口に、エンター闘争の全人民流動化を組織化する過程で、事実上の全国自治会共闘への成長を開始したのである。ここに、構革派学生運動は、六〇年安保以来、二つに引き裂かれた「全学連」運動を克服する真のヘゲモニーとして公然と登場する水路を開拓したのである。

わが同盟は、かかる過程をさらに大胆に推進するヘゲモニーとして自己の任務を設定し、構革諸派の政治的、組織的接近・統一を促進するあらゆるイニシアチブを発揮し、単一全学連再建の歴史的任務を現実化していくであろう。

この過程は、もとより、平坦な直線的な道ではない。七〇年安保に向け、目的意識的に一つひとつの全国闘争を徹底的に闘い抜き、全国闘争のヘゲモニーとして内実化させなければならない。

すでに開始されている全国侵略拠点撃破の闘争は、B52沖縄撤去――野戦病院闘争を基軸にし、政治焦点として大きくクローズアップされてきた。侵略拠点撃破の闘いは、第一に、ベトナム戦局の窮迫に伴い、ベトナム参戦国化の道を驀進する日本帝国主義の心臓部で侵略加担拡大の一つひとつの具体的発動を粉砕する闘いであり、第二に、ベトナム参戦国化とアジア核安保を結節する頂点にたつ、沖縄B52撤去闘争に呼応する本土――沖縄を結合する基地撤去、沖縄返還闘争の具体的な共同闘争であり、第三に、アジア核安保への接近を事前協議事項の拡大解釈＝侵略基地機能のエスカレーションを布石として促進する佐藤路線に抵抗しこれを阻止する闘争である。

かかる意義を持つ、全国侵略拠点撃破の闘争は、エンター闘争以降の政治的力関係の一定の変化、人民の左傾化、ジョンソン声明の影響に促進され、全国闘争として爆発させるならば、佐藤内閣を大きく包囲・動揺させる条件を有している。

沖縄―野戦で激化する現地闘争をさらに、戦闘化・全国化させ、佐藤内閣打倒の全人民運動を形成しなければならない。

すでにわが同盟を中核とする自治会共闘は三月二十八日から四月一日の野戦現地の連続闘争に大量の部隊を投入し、十数名の重傷者、五十名にも及ぶ逮捕者をだし[illegible]不屈の闘いを構築した。王子野戦病院現地の自主的な反対組織と首尾一貫した連帯闘争をかちとった部隊は、われわれ自治会共闘を除いてはなかった

沖縄―野戦を基軸にすえた全国侵略拠点撃破の闘争をさらに大規模に爆発させ、現地――学園ゼネストを結合する典型的な全国闘争を実現しようではないか。四月闘争を全国的なストライキ――現地闘争で展開させ、苦境にたつ佐藤内閣を追求する闘争を今すぐ準備しよう。

一九六八年四月一日